（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　山崎　泰孝

本論文は、現在でもしばしば「内面性の詩人」と呼ばれ、時にはその独我論的な世界観が批判される R.M.リルケ（1875-1926）において、「内なるもの」が決して安定した構図に収まるものではないことを論じ、「内と外の相互貫入と反転」として読まれうるような逆説的な表現空間へ彼の詩作が展開されていく過程を、個々の作品の細部に関する緻密な読解を通じて明らかにすることを試みた労作である。

全体は 6 章からなり、ほぼ作品の時系列に沿って配列されている。その際、それぞれの時期において、ある種の成熟と転回のドキュメントとなるような作品が周到に選ばれており、全体の枠組みに説得力を与えている。

評論『セザンヌ書簡』『ロダン』を通じて獲得された「表現の自立性」の理念は、中期の代表作『新詩集』において、事物を運動として表現し、その表現内容が言語形式と調和することで運動の自己回帰性と内的整合性が確立されるという形で、作品に結実する。しかしそのような内的完結性は、〈不在〉の契機によって媒介されており、この〈不在〉は作品と「自立性の理念」が「内的な回帰」によって安定してしまうことを妨げている（第 1,2 章）。内と外、不在と現前化の関係は、続く『マルテの手記』論では、〈声〉の主題、〈物語ること〉の可能性と不可能性、「放蕩息子の帰郷」における〈内なる外〉というパラドキシカルな存在様式への息子の変容、などを通じて分析される。そこで一貫して追跡されるのは、語り手マルテの〈体験〉を内的遍歴の軌跡といった読みに回収することを拒絶するテクストの断片的・逸脱的な運動である（第 3 章）。移行期の作品である連作『夜に寄せる歌』において、「呼びかけ」という言語行為の対象が人間的な領域の存在（恋人）からそうした領域を超出したもの（夜）へと移行していくことのうちに、後期作品の進む方向性が素描されていることを明らかにした（第 4 章）のち、後期の代表作『ドゥイノの悲歌』における天使への〈呼びかけ〉（第 5 章）と『オルフォイスへのソネット』が持つ〈ディアローク性〉（第 6 章）を検討することで論考は閉じられる。呼びかけにおける〈隔たり〉の契機、「私」の了解を逃れつづける「おまえ」への呼びかけによって形成される〈ディアローク性〉がはらむ、人間のものならざる言語への志向―作品の細部から、ある特徴的な言語的身振りを抽出し、作品全体の構図および詩人のこれまでの詩的探求との連関において、この身振りが志向するものを浮かび上がらせようとする論者の解釈は極めて説得的である。

従来の研究を十分に踏まえて、詳細なテクスト解釈により作品のあり方の転回・変容を跡付け、「内面性の詩人」から「内面性の彼方を志向した詩人」へとのリルケ像の転換を提示した本論文であるが、変容に注目するあまり、それを貫く一貫性の論述が弱い憾みがある。また、各詩集全体やジャンルの相違への突っ込んだ論及も望まれる。しかし全体としては、本論は独創性ある論考として高く評価しうるものといえる。よって、本審査委員会は本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい業績であるとの結論に至った。